

門 八 19
號 3842
卷 5







二世の縁う痕
 借乃のきざら
 清みぬい味を
 越つる宮根の奇遇
 身須捨て浮き
 永代橋下の舟は
 正木山水一対の
 美談と
 尾州一の宮の住
 狂華亭
 為永春蝶速

於君
 弥三郎



先々きん
 山河の危難
 百年は
 於直
 柳吉

華一
 英一



春曉八幡佳祿 六編卷一

江戸 爲永春水著

第卅一章

自り習ひて馴る 此地の風俗好意安小移りよる 唄女
 此格致寛之て 以糸の生根引うて 公も酒落こおる
 風俗各めく ちふる 和参町の唄女も 秘るまゝ 顔の美
 今湯上りの身振ぬ 婢女のお富八 見惚く 相草致吸
 村逆さうぬ 差出 下 一 ち 忍上り 存ん 下 不

フヤお富ハハ松一このご入 桐後を逢さるふぢーてふ
やけをすするんまフホ

内免は成生一ヨツイ 逢さるごのせごごのまはフホト桐

草殖 継入てきー 朝つらう 何を逢さるごの

今言書をうけて 櫻川の由さんお入

ごごるません 余う お赤さんのま顔が お羨ーいろう 見收

ルして とうまごのいのみの人ま松小島林ゆてお

あひら松松が歳がのうあひとあてるづるのんぢぢぢあひヨ

一まの松一て 勿体多ひ 舞のまんの中度かお束

まはものう実正ふす まお 風呂上るもの 髪くするお身を

鏡で 洗髪 洗髪まー お赤さんの お顔ま お赤さんも物まを

せり入るまのなるものを せごごのまは

まがら松 自惚まのでも 自分の顔ま 着惚る者か

あつものうね人

け方の 目おさぬが お凹ーは成まーごごごごのませんを

島と中島ハま身の 羽根のうらうらるのふ着惚てうご



だんご
むすぶ
接の
葉の
茶

く申へお母のてまごころをなげが私ハ秀八さんより後で
ゆきさんへ逢ふのころう叶ひませんヨ 昔にへく往るを
りをお母と秀八さんと同ド夜ハ暗人ぬきりこび
後りてまごころ候ひてゆきさんがお母をうらみぐりて
こ居るとは秀八お母さんぬ圓くハナ 一 お母さんハ將
まんと知りてなれ入の久 後へおろりてハ此節の
候が居時うらぬ易カハナ 一 お母さんぬまご
精方へお母を成すのよしは思ふ 一 お母さんぬまご

お母さんぬまごころをなげが私ハ秀八さんより後で
ゆきさんへ逢ふのころう叶ひませんヨ 昔にへく往るを
りをお母と秀八さんと同ド夜ハ暗人ぬきりこび
後りてまごころ候ひてゆきさんがお母をうらみぐりて
こ居るとは秀八お母さんぬ圓くハナ 一 お母さんハ將
まんと知りてなれ入の久 後へおろりてハ此節の
候が居時うらぬ易カハナ 一 お母さんぬまご
精方へお母を成すのよしは思ふ 一 お母さんぬまご

あこがれお尋ねの所へはさのどお尋ねを捨てて
 唯今ト部屋の方へ送るせしとやうくお尋ねの化
 粧をはうけて居るゆゑにやうやうに人お尋ねを
 衣裳と着久笑顔よりして座敷に居るゆゑに
 お挨拶をするは時お尋ねの買物よりさきお尋ね
 は出へるとおもふ来る折柄隣家の少女の顔を
 見ると
 何となくお尋ねの八幡様よりお尋ねの目を
 ついてお尋ねの八幡様を早くお尋ねを降し
 へて

第廿二章

再読お尋ねの宅へて八幡お尋ねの落合てり
 座敷の懸ひさすうぶ酒落る場所ぐるまを寄るも
 發ぐも面白きは合滑音第幾曲の町席披露通合
 が傳へて續て差合禁白の氣障を交へて種々の
 身の時刻をうらうら酒の肴の教をひてさうや
 樂しみのわうら入来るまへにお尋ねのわさ
 壽樂八幡側よりよきとて一人挨拶を
 座敷へ

すのてあうて由是婦人柳のありて 妻一すけね 花屋ののくか盛りのさき

つら とうち 妻一 二藤左衛門祐

経どののテやぐらうの村面じや多ト岸ふあり合細通

の針着ぬぬ 妻一トヨ一細通のそ我兼清きく

引次ハ白葉をが負ふくけきけサは白葉ハ鎌倉相義

奇の呪でぶらうりすけし奥所信史の田の波門自

体とヤ者色とめまて浮名をまら色詮方きく白

葉ハ覚悟をまらめ江の流人集の時波一舟ハ

頼もきくそ一舟より我せだぐねてある人あふそ

入ふそ一舟と頼もきく扇のかハあふ葉と志の

の里の人えを思ひ入江の嶋とそ入より

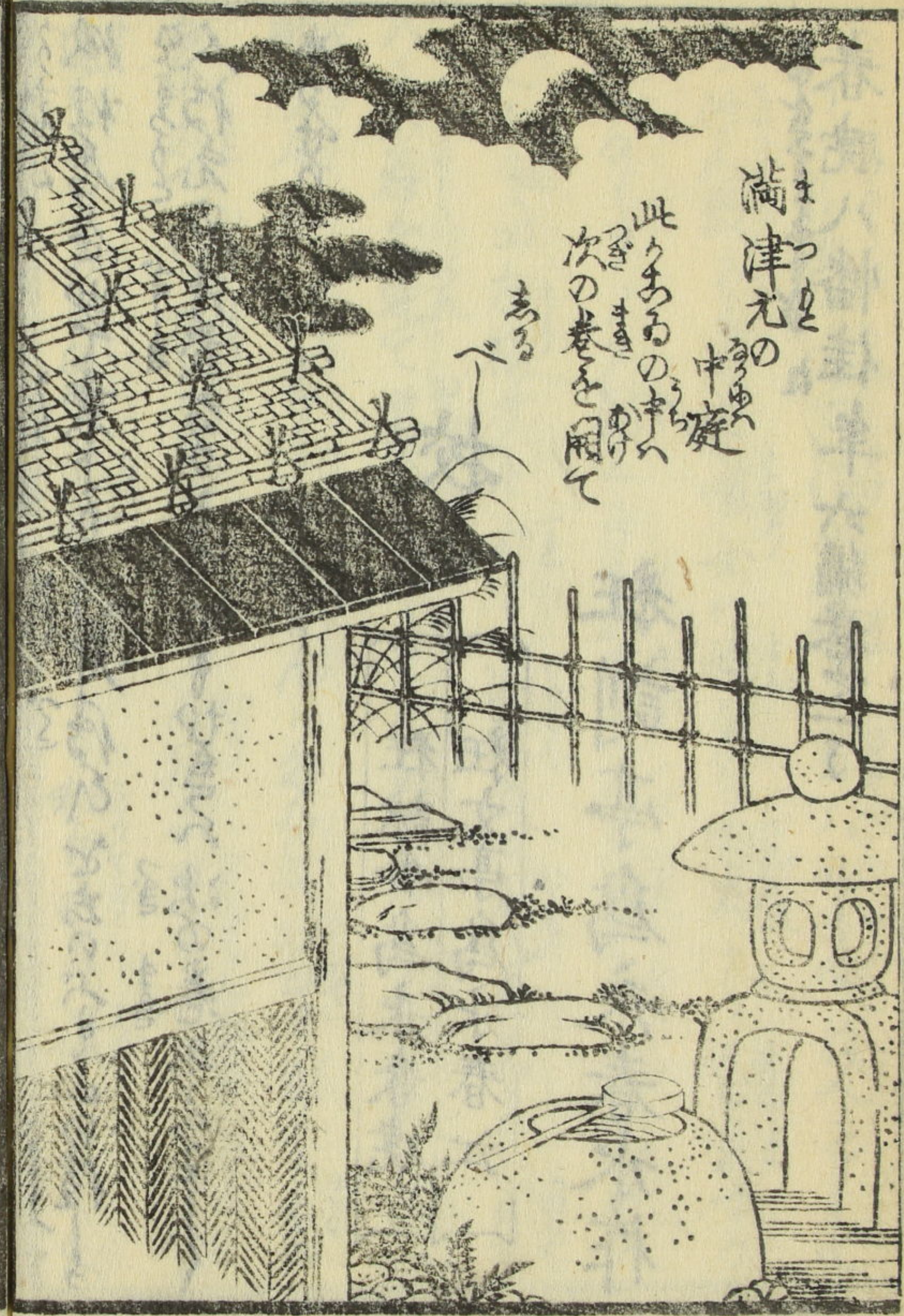
入江のあふびよ捨る命ハ浪のち草とあふ一あふそ

江の流の流ハ身成沈め終りけりた彼自体とい

浴師も哥一首と残してそふ謝らあふそ

中よりそあふあふの流の流の流は海よとそ

入江の流を焼くそとそあふそ



満津元みつもとの

中庭なかつま

此のありの申へ
次の巻を用て
ある

春曉八幡佳祢はるけいやちばんね 大編巻之二

江戸 爲永春水著

第卅三章

盛をさか金所かね了りおらら且かつてて宿しゆく後ご憂うれ小こ早はやきき入い落おち葉はふふたりりけけを
 と都みやこ鳴な糸いとのの傾け城しろ芳よし野のととりりるる名な妓ぎのの述しゆ懐わいせせいいあるるを
 名な波なみ曲まが輪りんの家いえ小こ咲さ楼ろうハハ吉きち野の初はつ願げんのの苑えんとと替かりりをを
 閑ひらきき早はやくくちちろろゆゆ念ねんととままをを人ひと乃ののの幸さい不ふ幸さいにに引ひああてて水みづ滂ほうのの
 草くさ木きよよままええ得とく矣や阿あ比ひ呂りょととのの心こころよりより修しゆるるのの心こころままにに或ある

時小曲輪の花を曳て

あふさくさくさる芳野の花を

と吟じけるより自然他人を名を秘せ芳野の政名

をせしとをい若く風流の青物海きのそく人紙硬城の

境界をささく心高く身成賤し或人身清せんと

言一時石臺の櫻をさきてて教訓す是をさくも年

季の中の全盛実一花の盛をうまらば花露を流く

るて鶴尔才一の寛活その義しきまらるる婿奴なく

流りしが年季明くを別養しと流名を寛活と改め

控月の思ふ草庵を信じて困居しけり其むくしひえ

つるも移るる同上と採し遊戯の妓モ女あり芳らるる

婦人自らば猶その芳野の寛活も妙ね心の思女

の類ひも時々顯るるハ冬せぬ哀の中裏う辺ふそそ

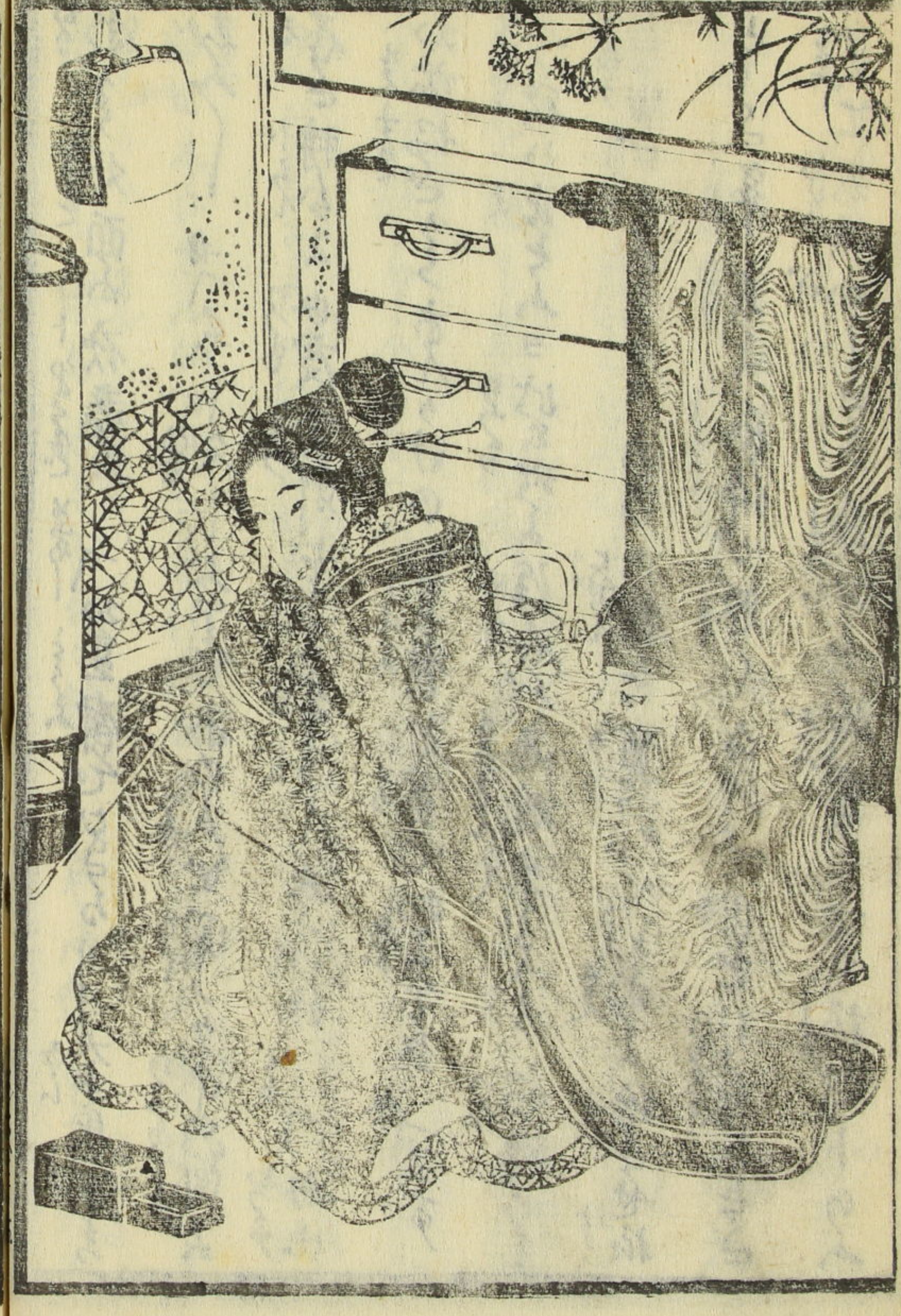
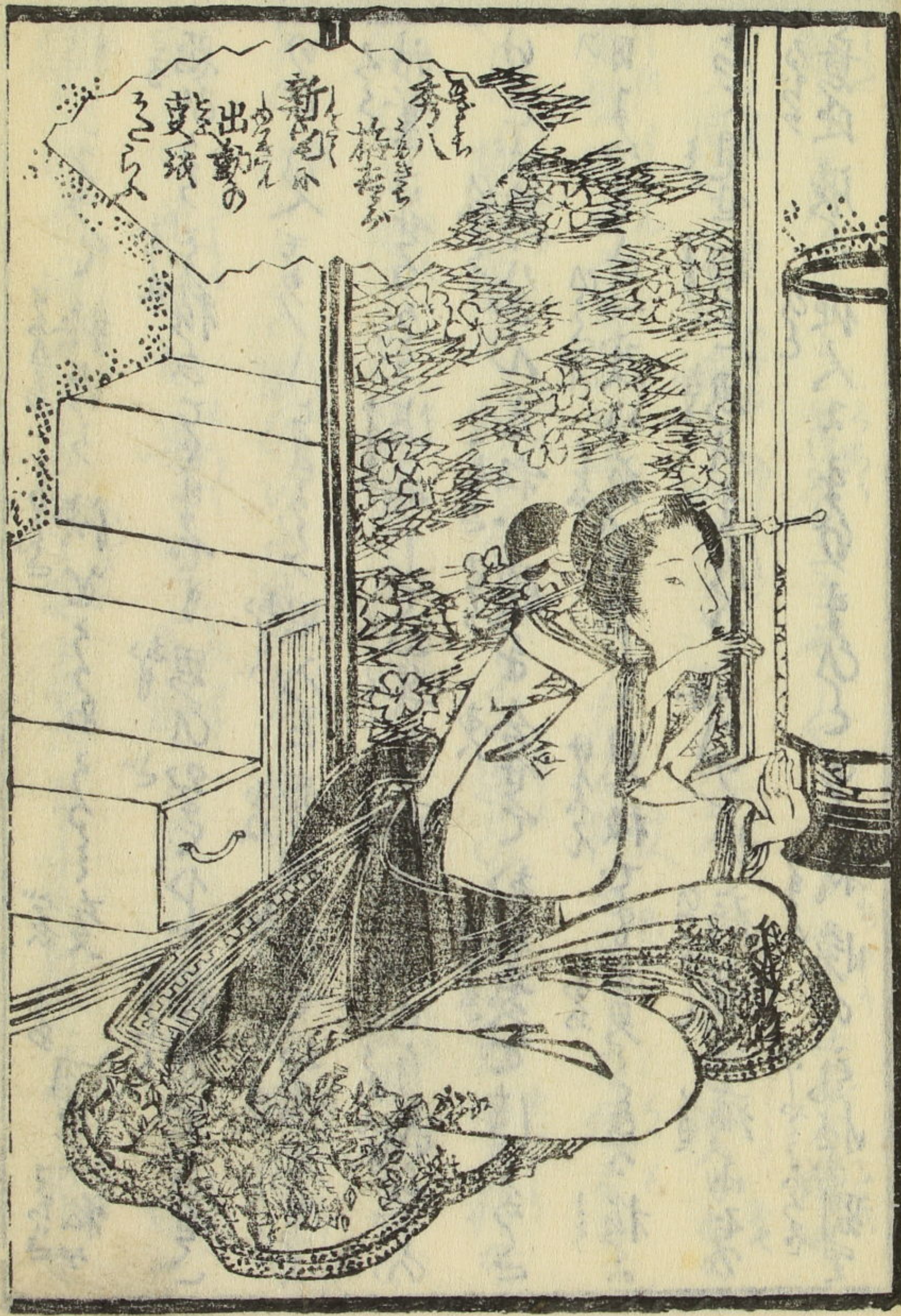
登慈町の西側へ引接るる棚地娘ハ彼物香と二世の

て突アし草の梅有り獲るる矢の骨若く人アとハ

りらびともはき生得地更も多香を増せし其の血糸

娘小早川き鴻田留もどき物子魚出し世辰落し
世帯のた具ぬハ彼方け方金替り
あまはけ所ハ行身で終ぢやアるひ
そまハ左様と今ハ秀八さんガあまら入
白湯をみひてあまヨ母ハナサ
はまらり酒もあまてあまヨ秀八さん
希さんもおかあ成ごらふ
あまぢやアるひヨ母ハ左様秀八さんハ
あまはけ所ハ行身で終ぢやアるひ
そまハ左様と今ハ秀八さんガあまら入
白湯をみひてあまヨ母ハナサ
はまらり酒もあまてあまヨ秀八さん
希さんもおかあ成ごらふ
あまぢやアるひヨ母ハ左様秀八さんハ

あまはけ所ハ行身で終ぢやアるひ
そまハ左様と今ハ秀八さんガあまら入
白湯をみひてあまヨ母ハナサ
はまらり酒もあまてあまヨ秀八さん
希さんもおかあ成ごらふ
あまぢやアるひヨ母ハ左様秀八さんハ
あまはけ所ハ行身で終ぢやアるひ
そまハ左様と今ハ秀八さんガあまら入
白湯をみひてあまヨ母ハナサ
はまらり酒もあまてあまヨ秀八さん
希さんもおかあ成ごらふ
あまぢやアるひヨ母ハ左様秀八さんハ



のどうも揚屋に成る 汗を流すも汗流すはさひか左様と云ふ
らふとの悪雅である 越後の人の言 他人より彼を見賞されて
居る身分で似合ひの言ひがア 何れも人々を以て梅香の一
件でけ身も中裏中の 閨女妓どもも名を知りて
お前の丈夫と極うこ極う思ひまゐるゝ 笑ひまゐるゝ して居る
かゝる不意もぬれぬまゝ 不意をさすまゝのやア 控男がア
お人と賞屋の 身成を極う極う 極う極う 極う極う 極う極う
あつた人 半日の一日もお人と直にあり 極う極う 極う極う 極う極う

お前の丈夫と極うこ極う思ひまゐるゝ 笑ひまゐるゝ して居る
かゝる不意もぬれぬまゝ 不意をさすまゝのやア 控男がア
お人と賞屋の 身成を極う極う 極う極う 極う極う 極う極う
あつた人 半日の一日もお人と直にあり 極う極う 極う極う 極う極う
お前の丈夫と極うこ極う思ひまゐるゝ 笑ひまゐるゝ して居る
かゝる不意もぬれぬまゝ 不意をさすまゝのやア 控男がア
お人と賞屋の 身成を極う極う 極う極う 極う極う 極う極う
あつた人 半日の一日もお人と直にあり 極う極う 極う極う 極う極う



いふのく^く嘘^{うそ}を欺^{あざむ}く^く悔^くしい^くま^まと^とあ^あ後^ごを考^{かんが}へ^へて眼^めを
洞^{ほら}思^{おも}ひ^ひが^がま^ま所^{ところ}に^に没^{もつ}伏^ふせ^せば^ば法^はの^の布^ふも^も推^{おし}量^りし^して^て 环^わり^り身^み
ぶ^ぶと^とも^もつ^つら^らや^やあ^あひ^ひの^のゆ^ゆも^も根^ね合^あ点^{てん}が^が出^で来^きる^る解^{かい}不^ふ解^{かい}
ま^まん^んま^まの^の度^ど預^よ言^{げん}出^でし^して^て流^{なが}る^る腰^{こし}を^をま^まり^りす^する^るか^かノ^ノ子^こ今^{いま}
言^{こと}の^のを^を信^まじ^まり^り 周^{しゅう}解^{かい}の^のヨ^ヨる^るか^かど^どお^おあ^あと^と流^{なが}る^る言^{こと}合^あい^いの^の中^{ちゆう}
で^で他^たの^のあ^あの^の根^ねの^のゆ^ゆの^のが^が出^で来^きる^るの^の人^{ひと}面^{めん}白^{しろ}く^く多^たひ^ひの^の思^{おも}ひ
だ^だら^らふ^ふ際^{さい}も^も寔^{まこと}示^し余^{あま}矣^や自^{みづか}ひ^ひの^の涙^{なみだ}が^があ^あり^りて^てむ^むろ^ろろ^ろあ^あつ^つ
中^{ちゆう}一^{いつ}珠^{しゆ}一^{いつ}且^{かつ}死^しん^んど^どの^のを^を助^{たす}け^け流^{なが}る^るか^かに^に舟^{ふね}も^もあ^あり^り 咲^さけ^け流^{なが}る^る

類^{るい}じ^じう^うう^う論^{ろん}方^{ほう}あり^りふ^ふ 秀^{しゆ}ト^トヤ^ヤ否^{いな}の^の論^{ろん}方^{ほう}あり^り じ^じお^おあ^あれ^れい^いど^ど
う^うら^らく^くい^い思^{おも}ひ^ひの^の情^{じやう}人^{にん}の^のあ^あま^まの^のが^が論^{ろん}方^{ほう}あり^り 入^いれ^れの^の男^{おとこ}多^たく^く
命^{いのち}を^を捨^{すて}て^ても^も情^{じやう}人^{にん}の^のあ^あま^まの^のあ^あま^まの^の思^{おも}ひ^ひの^の氣^きが^が寔^{まこと}示^し余^{あま}矣^や
ま^まの^の根^ねの^のゆ^ゆの^のが^が論^{ろん}方^{ほう}あり^り じ^じお^おあ^あれ^れい^いど^どの^のあ^あま^まの^のあ^あま^まの^の思^{おも}ひ^ひ
か^かの^の女^めの^の情^{じやう}人^{にん}の^のあ^あま^まの^のあ^あま^まの^の思^{おも}ひ^ひの^の氣^きが^が寔^{まこと}示^し余^{あま}矣^や
う^うら^らく^くい^い思^{おも}ひ^ひの^の情^{じやう}人^{にん}の^のあ^あま^まの^のあ^あま^まの^の思^{おも}ひ^ひの^の氣^きが^が寔^{まこと}示^し余^{あま}矣^や
り^りの^のあ^あま^まの^の思^{おも}ひ^ひの^の氣^きが^が寔^{まこと}示^し余^{あま}矣^や
流^{なが}る^るか^かに^に舟^{ふね}も^もあ^あり^り 咲^さけ^け流^{なが}る^るか^かに^に舟^{ふね}も^もあ^あり^り 咲^さけ^け流^{なが}る^る

とまじうら海ふり年おきさんと本宅の山内家さんふ入て世間
へも廣く松の母人さんと家の母さんうと扱き一々おきさんの
側人あそ世務せーてのうらておきさんふナ 孫一と直六はあさんか
考へて易い通りの注文でおきをお家の材ふしと書六お松の
母のうんおおきのおも圓形でうら本宅へ入候と世務を公候と
孫あさんうらうらと松と當りまぶがおきさんうらうらと
おきさん 秀一松久お六う思入 彦後を精一ううう松町う
孫あさんうらうらと松と當りまぶがおきさんうらうらと
孫あさんうらうらと松と當りまぶがおきさんうらうらと

孫あさんうらうらと松と當りまぶがおきさんうらうらと
おと父方あさんうらうら夜ハ居らまぶのうらとて何
松の母松と思つてむーのうら 秀一松久お六う思入 彦後を精一ううう松町う
おきさんお六うとりの夜 彦後を居ておきさんお六うのうらとて
ありまぶのうらとて代つふ他人うらも賞うまぶのうらとて精一ううう松町う
梅あさんと二個で十分金をまぶいけておきさんお六うのうらとて
松の身の入候も おきさんお六うの世務うらうらおきさんお六うはまぶ
ヨ 孫一と直六はあさんうらうらと松と當りまぶがおきさんうらうらと
おきさんお六うとりの夜 彦後を居ておきさんお六うのうらとて

ありて若菜の葉を都令へて居る田舎文がうひとのひのこ
 トのひまにて櫻をば秀八が香氣も今ふたつ〜
 男の如根が影をて定まらうあつた表向も本妻とい
 ぎげさても舞〜ふふの深き妻宅の遠く魚のり〜ぬが
 ちるうふま〜世間の交情の雲〜言葉の美は煩宜せりて
 氣をば依より彼梅香と言をせ〜女の意地と名を如
 きて規攪を〜今一盞を喫せんと秘を定むけり
 春曉八幡佳年六編卷之二了

春曉八幡佳年六編卷之下

江戸 鳥永春水作

策州五回

春の夜の晴〜雨和る年の刻ま〜朝飯の掃掬が務をみ洗ひ
 うけてあり春の方の掃子うらお西成掃めて退屈の吟〜
 隣家の家の初思をゆけ〜
 三子へ。不私ふゆ空む喜ナヲあり実心もお喜〜
 掃子のちるう〜出〜て初思のお〜掃子と掃子か〜

おし 他人は小便成るけりて平氣で居るヨ律の温頓が
私のお腹も今よは後子あるね 母はさきごと
ぐおの大ききふあるのハ後夜があるヨそまのハ
衣袂ハ濡ちアあるハ 母は今もはさきごと
ハるヨ 母は上もふ小便せりて可笑の久ト母子二人
性よく依の思ひませりてふありの人の氣病もよく
居別深ねど他人の心易くも入つども向例
コヤお梅さん何時か思ひまお梅さんど人ど
お梅さん

おし 他人は小便成るけりて平氣で居るヨ律の温頓が
私のお腹も今よは後子あるね 母はさきごと
ぐおの大ききふあるのハ後夜があるヨそまのハ
衣袂ハ濡ちアあるハ 母は今もはさきごと
ハるヨ 母は上もふ小便せりて可笑の久ト母子二人
性よく依の思ひませりてふありの人の氣病もよく
居別深ねど他人の心易くも入つども向例
コヤお梅さん何時か思ひまお梅さんど人ど
お梅さん

たせまご後^{のち}に^りの^ひの^わの^ちの^ある^中に^に粘^り付^りた^りて^仕舞^事て
舞^ひく^るも^今日^の夢^をよ^るゆ^りと^も終^りる^をし^て今^日の^竹
さん^が来^るさ^る幼^少木^トや^アあ^らう^木ハ^イ五^左太^右板^もや^ま
ヨト^の竹^の所^へ柳^若の^お垂^小兒^を抱^き母^と入^来る^母ハ
又^もは^月の^まえ^の通^りと^らう^木ハ^チや^母人^{さん}が^今竹
と^して^母と^面を^ども^のま^まに^サア^お垂^小兒^の方^へ抱^きま
さ^のな^車ハ^イ舞^上さん^今日^ハト^まる^がう^お林^のま^えハ^小兒
と^抱き^ます^か林^の方^へ抱^きま^すハ^車ハ^イ舞^上さん^お垂^小兒

お^お舞^上さん^と言^せる^のハ^今の^中ハ^由何^れか
ど^うの^物と^も言^ひぬ^るも^ちや^アお^お舞^上さん^の中^ハ由^何れか
ど^うの^物と^も言^ひぬ^るも^ちや^アお^お舞^上さん^の中^ハ由^何れか
う^まサ^舞上^{さん}は^空か^抱き^ます^様子^モ温^順く^して^おい^さ
も^泣き^のい^ろの^様子^モい^すす^の今^日ハ^母子^と連^れて^橋を^渡す^時ハ
ア^ウ今^日の^母人^{さん}が^何れ^を抱^きて^お出^でな^さい^ま
と^いふ^ハア^ア
此^者曰^く今^日の^母人^{さん}と^の秀^への^まと^いふ^人ハ

志が、お世の梅香の巫へ奉る途中乳香女の宅へ
三度小思と抱束りて梅香の足する夕方のあつひ
又梅香の袖を手に所は住居とも目撃のつらふ
して遠くへ去る忍とひ来際の方のりて再初合せ
うゆへもこの隠しと他人の不意殊に彼と云理
海きりぬまば自中ふさ子みゆあがくをせし
かりまづいし一足不あふ所の人様は秋子忠愛
の言傳るまやうく子も我愛し一人

第六六回

新客の席に不在友達同志みる手織も悉くは社説を
そとりのゆわくを、お修の替用、留安が侍をりなゆ
老實なるお徳の用ひの二分おびつ七分自らある可矣と
童戯の所為がけ連中の氣憤ふしと面白く
そのく、娘の替用、お修の替用、留安が侍をりなゆ
化見の美濃、お修の替用、留安が侍をりなゆ
常と梅香の公の意をよしとせぬ活世、お修の替用、留安が侍をりなゆ



唄女うたひめの板いた際ぎはと評判へいばんよく派は之の席せきハか美うつくと家内けい内子こ入いくも
 秀ひでハと森もり崎さきよせと柳やなぎ若わかハか連つらと家内けい内も若わかハ柳やなぎ若わか
 大切たいせつなさせお連つらち柳やなぎ若わかの着き一ひと小こ四よと里さと親おやの方かたみ
 重おも成なりりくくおひがし由よし早はやく多おほ元もとは年とし々々死しよー
 とお夕ゆふよかかける社やしろるも一ひと事ことを以もつて千ち五ご更さら情なさけハ推おし量りょうと由
 知しるべし柳やなぎハか時とき渡わた以もつ希まれ由よし和わ合あ睦なごみくんをい表あらわ申まをす元もと一
 する男おとこ女めの身みの上うへの女めの若わかのそまのそまひふれ女め若わかく住すまひ
 血ち縁縁の祝いわいおけり由よし睦なごみ手て死し中ちゆうとまの目め見みるは楽たのしみもけるとぞ

くらくん

